

令和3年度第1回日野町総合教育会議議事録

1. 日時：令和3年（2021年）7月30日（金）16時00分～17時15分
2. 場所：日野町役場 防災センター 202会議室
3. 出席者
堀江和博日野町長
日野町教育委員会：安田寛次教育長、西村吉弘教育委員
吉澤正義教育委員、神川貴子教育委員（谷信代教育委員 欠席）、
庶務：正木博之企画振興課長、増田武司企画振興課課長補佐
宇田達夫教育次長、吉澤増穂生涯学習課長、長谷川毅図書館長、柴田和英子ども支援課長、
小椋慶洋学校教育課参事、吉村俊哲学校教育課参事、
4. 傍聴人 0人

開会（企画振興課長）

町長・教育長あいさつ

協議事項

町長

それでは協議事項に移らせていただきたいと思います。
令和2年度教育行政報告について、報告をお願いします。

宇田次長

それでは、昨年度より取り組みをさせていただいております令和2年度教育行政報告をさせていただきます。

始めに、目次と「はじめに」ということで、この辺りは昨年通りです。4ページに「教育委員会の組織および活動」、5、6ページにつきましては令和2年度の「教育委員会で審議された議題」について記載しています。7ページからは「日野の教育をめぐる現状について」ということで、まず「社会情勢の変化」です。「（1）人口減少社会と町内の学校・園の連携」「（2）GIGAスクール構想の実現と学習指導要領の改訂」ということで、これについては前年度より少し内容が変わっています。

続いては「学校教育を取り巻く現状」ということで「（1）子どもの学力・学習状況」「（2）子どもの教育における現状」について記載しています。10、11ページには「社会教育を取り巻く現状」ということで、「（1）社会教育の現状」「（2）文化・スポーツの現状」について記載し、昨年度から追加して「（3）文化財の現状」「（4）図書館の現状」について記載しました。12ページには「第3期日野町教育振興基本計画における3つの柱と取組方針」、13ページからは「主要施策の概要と成果」ということで、各事業の内容や決算額について記載しています。これを見ていただくと一連の各事業についてわかっていただけたと思います。昨年についてはGIGAスクールにおける通信環境や、コンピューター機器整備に多額の費用が掛けられていることがわかり、また、17ページからは生涯学習、24ページには図書館、25ページからは決算資料ということで、各統計資料を記載していますので、ご覧いただければと思います。以上でございます。

町長

ありがとうございます。この資料は教育委員さんに今渡したのですか。

宇田次長

本日の教育委員会定例会でお渡ししました。

町長

もうすでに見ていただいていることかと思いますが、これに関することでご意見等がありますか。

西村委員

今回が２年目の教育行政報告になりますが、本来ですと報告と評価はセットであります。評価については、来年度以降の宿題となってくるのではと思います。自治体によっては、評価が入っていると報告書自体が分厚いものになります。

評価される委員の方が別におられて、それぞれの専門性を発揮した評価をされるわけです。それはやはりある程度の規模のある自治体の教育行政についてはもちろんそういうことが必要であると思いますが、日野町におきましては、私はやはりこうして「今までこういうことをきちっとやってきた」という、記録を蓄積していくという段階を踏み、いずれは評価を加えていくという方向でよいと思います。

宇田次長

今のお話は大きな課題だと受け止めています。まず、指摘していただいたとおり、昨年から始めた報告書を自信をもって出せるよう、いずれは外部の評価を入れていかないといけないと考えています。

教育長

先日、社会教育委員会議の際に、委員さんから社会教育の関係で毎年多くの事業が展開されますが、その事業そのものについての評価かどうなのかということを客観的に評価していくことも重要ではないかとご意見をいただきました。西村委員が発言されたとおり、今すぐということではないですが、将来的にはそういうことも視野に入れながら、評価をしていただくことも必要ではないかと思います。学校関係では、学校評議員さんや、PTAの役員さんやPTAの皆さんに評価をいただくなど、外部の方に評価をいただきながら次年度の学校運営を検討していくということをしております。教育委員会についてもそういったことを大切にしていかなければならないのではないかと思います。

西村委員

私も教育行政のなかにというよりも、すべての分野でPDCAサイクルによるマネジメントシステムが定着しており、それなりの成果を上げています。そう言った面からも、先ほどからの話のように、一定の蓄積を経たうえで、評価も受けてPDCAサイクルにより全体でレベルアップを図っていく方向が望ましいと思います。

町長

貴重なご意見ありがとうございます。その他、ご意見等がありますか。
それでは、次の町立小中学生の学力について報告いただきます。

小椋参事

私の方からは、日野の子どもの学力・学習の状況についてということで、今年度は5月27日に実施しました学力調査の結果を踏まえて、日野の子どもたちの学力・学習状況について簡単に説明させていただきたいと思います。

最初に、お手元にあります先ほどの教育行政報告の8ページをご覧くださいませでしょうか。「子どもの学力・学習状況」のところに、コロナ禍により令和2年度の全国学力・学習状況調査が実施できませんでした。昨年度は統計調査がきちっとできなかったのですが、それでも近年の調査でわかっていることは、全国、滋賀県、日野町の傾向はほとんど同じです。どういうところに子どもの苦手なところがあるかということは、冊子の8ページに書いてある主な3つのことです。ポイントとなることがわかるように赤字で示してみたのですが、子どもたちは、簡単な語句や短文、一つの資料などから内容を読み取ることはできています。「目的や意図に応じて」この言葉がキーワードなのですが、自分の考えの理由を明確にしてまとめて書く力に課題があります。また複数の資料から、また出てきますが「目的に応じて」読み取り、説明する力に課題があります。「目的に応じる」というのは、「今読んでいる資料を使って友だちに説明する」という目的や、「記録を残す」「調べたことを報告文としてレポートにまとめて書く」といった、どういう目的で資料を読んでいるのかということを意識したうえでそれを活用するという力をつけていくということが、この学力調査のなかで問われます。その部分が、子どもたちはなかなか難しい傾向にあります。先ほど町長が「問題がありますね。これ小椋先生に採点してもらおうのでしょうか。」と言われたのですが、実はそのとおりのことを計画しております。今申し上げました子どもの課題、挙げました3つのことをどういうことなのか実体験していただこうと思います。これから解答用紙を回させていただきます。小学校の、たくさんある冊子のなかから、小学校6年生対象の「小学校第6学年 国語」という冊子を探し当ててください。この問題の表紙にこう書いてあります。「先生の合図があるまで中を開いてはいけません」、5番のところに、「解答時間は45分間です」とありますね。子どもたちは一冊の冊子の問題を45分間で解きます。なかには大きな問題が3つあって、その大問のなかにそれぞれ一つから三つ四つくらいの小問があって、今年は14問で構成されています。45分で14問解くので、難しい問題と簡単な問題がありますが、一問当たり3分くらいの時間をかけるとして、大問2の(1)から(4)の4問だけで結構ですので、12分間タイムを計りますので、一度皆さんで挑戦していただけたらと思います。解答用紙、大問2の解答欄がどこかも探してください。子どもはそれも難しいです。では大問2を開いて、始めたいと思います。スタート。

12分経ちました。実は私、無茶なことを言いました。答案用紙の裏を見ていただくと、どう見ても2番にかかる時間がありそうですね。おそらく45分のテストのなかで、この問題にかかる時間が20分から25分くらいかかるだろうと思います。実際にこうやって文字を書かなければならないので、12分でできるということはありません。もう少し納得がいくところまでやっていただいくために、もう少し待ちます。

今見ていると、最初下書きを書いておられませんでした。使っても使わなくてもいいと書いてあるのですが、真面目な子どもは下書きを書こうとするのかもしれない。おそらく下書きを書いてしまうとテストの総時間数が足りなくなってしまうので、やはり直に解答用紙に書かないと

いけません。それから、紙をペラペラめくるのが難しいと思います。最初によくわからないうちに長文を読んで、その後問題を読んで何を聞いているのかと思ったらまた長文に戻らなければなりません。そうすると何を答えたらよいかわからなくなってしまいます。なので、今は点を取らせるためにどういうことが起こっているのかと言うと、まず問題用紙を最初から最後まで全部見てどれくらい時間がかかるか自分で考えなさいということや、こういう大きな問題があれば先に問題を見て何を聞いているか考えてから文章を読み始めた方が効率いいといったテスト技術を教え込みがちになってきているのが事実ではないかと思います。確かに技術はあると思いますが、大人ならそういう要領を段々と覚えていくと思いますが、子どもたちは、初めてこれを行った平成19年頃はパニックになっていました。子どもたちは段々慣れてきましたが、こんなに難しいことは私たちの子どもの頃にはなくて良かったなと思いました。

では、そろそろ答え合わせをしたいと思います。12分で解けというのは無理なことだと思います。まずは小問1です。「相川さんが読んだ【資料】の文章は、何について、どのように書かれていますか。その説明として最も適切なものを、次の1から4までのなかから一つ選んで、その番号を書きましょう。」という問題です。これは文章全体の構成をとらえて、要するに何か書いてあったかということと内容を掴んで、内容の中心となる事柄を把握できているかということを見る問題です。選択式です。正答は1です。正答率73.7%です。毎年、各学校で、国に提出する前に子どもたちの答案用紙のコピーをとり、先生たちがそれを丸付けします。それを国や県から来るエクセルの集計シートに入力して、何%だということをはじき出したりする作業を、時間のある学校はすぐに行います。早くにできた学校が協力して、県にデータを送れるところがあれば送ってくださいということで、今年、現時点で協力した子どもの数が3,417名分のデータが県に集まったのです。日野町の学校はすでに送ってくれたかどうかは把握していないのですが、その子どもたちの正答率が73.7%です。

次、小問2ですが、「相川さんが選んだ【資料】の「より」と同じ使い方のものはどれですか」というものです。「ホックやボタンより留め外しの簡単な面ファスナーの方が」というものです。これは語句の使い方が理解していて、「より」という言葉をいろんな場面で使えるかという問題ですね。これは易しいですね。正答率は83.4%です。

さて、次です。小問3、「目的に応じ文章と図表とを結びつけて必要な情報を見つけるかどうかを見る」という問題ですが、模範解答はこのような文です。「メストラルは、ゴボウの実が犬の毛に絡みついていたことをヒントに、かぎ状のフックが輪の形をしたループに引っかかることでくつつく仕組みの面ファスナーを作り出した。」丸まで入れて80文字です。ただ、条件が、「以下の内容が取り上げていること」を全部クリアできていないと、この問題は正解にならないです。正答率20.1%です。ヒントになったことを書いていますか？ゴボウの実が犬の毛に引っかかって絡みついていたということがヒントです。面ファスナーがくつつく仕組みも書いていないとダメです。かぎ状のフックが輪の形をしたループに引っかかる仕組み。さらにその言葉を違う言葉で書かず資料のなかにある「かぎ状のフック」や「ループに引っかかる」という言葉を使っていないとダメなのです。さらに50文字を超えて80文字までで書いていないといけません。当初はこの50、80がうまくいかない子が大勢いました。最近これはよくなったのですが、どうしてもこの条件をきちんと扱えない子が多いです。誤答の例です。「植物の実が動物の体に絡まったことをヒントに、釣り針の形がもう一方の面に引っかかる面ファスナーを作り出した。」ヒントは書いていますが、資料のなかの言葉をうまく使えていないので、これでは丸はもらえません。「愛犬の毛にたくさんついた野生のゴボウの実は、先の曲がったかぎ状のとげでおおわれており、これをヒントに面ファスナーを考え出した。」これはくつつく仕組みが書けていません。

「面ファスナーはかさや靴などの留め具として様々な製品に使われていて、簡単にくっついったりはなれたりするととても便利な道具です。」ヒントになったことも仕組みも書いていないというので、大体の子は書けなくなると書いてある文章のどこか一節を写そうとするので、そうすると先ほどの条件が守れなくなります。多くの市販のテストは、大体解答欄のほぼ上に答えになるような文章があって、その文章をそのままとってきたら答えになるような文章に慣れています。あちこちから言葉をとって、条件に合わせて文章にするというのは子どもにとって難しい。だからこれは20.1%です。大人でも難しいです。

最後に問4です。目的を意識して中心となる語や文を見つけて要約することができるかどうかです。要約は小学校4年生の学習内容です。掛け算の九九が2年生、分数が4年生、約分や通分は5年生で習います。要約するという学習は小学校4年生です。段落という言葉は何年生で出てくるとかなど、国語にもそういう決まりがあります。これがなかなか難しいのですね。「面ファスナーはしっかりとくっつき簡単にはがせることから、物が浮かぶ国際宇宙ステーションのなかで身の回りのすべての物の固定に使われている。」これが模範解答です。まず資料で説明されている面ファスナーの良さ「しっかりとくっつき簡単にはがせる」、それから国際宇宙ステーションでの使われ方「物が浮かぶなかで身の回りのすべての物の固定に使われている。」。こういうことを資料のなかの言葉、「国際宇宙ステーションのなかで身の回りの」や「簡単にはがせる」という言葉をきちんと使ってこの範囲で書くということです。正答率は23.6%です。「くっつきテープは着脱がとても容易なので宇宙船のなかで日用品が浮遊しないために使われている。」は、資料の言葉が使えていない。「面ファスナーには簡単にくっつけたりはがしたりできる良さや、布のように柔軟性があるという良さがあるので、宇宙で使われている。」は、国際宇宙ステーションのなかでどう使われているか書けていない。「国際宇宙ステーションのなかではペンやスプーン、カメラなど身の回りのすべての物を固定するために面ファスナーが使われている。」は、面ファスナーの良さが取り上げられていない。これらのように一生懸命書いたのに丸をもらえない、どこか条件が抜けていたら不正解です。そういう問題です。一般的に学力テストと言いますが、これは点数をつけるテストではありません。学力調査です。選択式問題、短答式問題、記述式問題の配点などはありません。単にどれも1問の正答として数えます。問題用紙の13ページを見てください。大問3、この文章のなかに「ア ころがっている」「ウ つみ重ねられている」「エ げんいんなのだと思います」と書いてあります。17ページに「アの部分を漢字でていねいに書きましょう」「ウの部分を漢字でていねいに書きましょう」「エの部分を漢字でていねいに書きましょう」と書いてあって、「ころがっている」「つみ重ねられている」「げんいんなのだと思います」と漢字を書く問題がありますね。答案用紙の裏側の(1)ア、ウ、エというところを見てください。「転がって」や「積み重ねて」が書ければ、先ほどのとても難しい問題の丸と同じように1問の正解になります。漢字が一つ書けたら5点でこれだけの作文が書けたら20点ですということにはなっていないのです。すべての全14問から16問ほどの平均の正答率だけが新聞報道などでランク付けされて、東北、北陸地方といった3世代同居の地方がすごく良くて、ある県といったところがいつも悪いと言われますが、漢字も含めての平均正答率だけで新聞などで報道されるので、我々現場の教員にしてみたら、どうしてこんなことで比べられなければならないのだらうと思います。おそらく子どもたちもそう思うのではないかと思います。大事なことは、どこが私たちの教えている子どもの強みで、何が弱みなのか、それは日々の指導にどうしたら活かすことができるのかを考えるのがそもそもこの調査の目的です。ただし、日野の子どもの学力は決して高いとは言えません。正答率が県や国の平均を下回る問題は多いです。国の課題であるところは県の課題でもあり日野の課題でもあります。日野の子は平均より

も下回っている問題が多いです。そして、調査などで明らかですが、家で勉強している時間が足りなかったり、ゲームなどに使っている時間が多いなど、家庭学習の習慣が不十分です。それは学力調査と同時に実行される中学校の生徒質問紙というのをつけましたが、このなかを見ていただきますと、「平日何分くらい勉強していますか」といった質問があるのですが、その結果からも学習習慣の面でも鍛えていけないといけないなということがわかるのが事実です。なお、今年は、質問紙調査の12ページから13ページにこんな図があります。「家に何冊本がありますか」という質問で、「500冊ある」という子のために「500冊は大体これくらいのイメージです」という図があって、家に本棚があってどれくらいの本があるかという家庭の状況までも調べているというものです。

教育委員の皆さんの前に少し色合いの異なる別のテストが置いてあります。標準学力調査と言います。町で予算化して、議会の委員会などでも質問をいただいたりしますが、日野では予算化して漢字検定や英語検定に取り組んだり、全国学力学習状況調査と同じ日に、対象でない小学2年生から5年生と、中学1、2年生の子どもたちに、全国学力学習状況調査と同じような構成で作られていて同じような力を問われる問題を受けさせていただいています。これは民間のテストですので町の予算で、無償で子どもたちに受けていただいています。これを全部業者さんが採点して結果をエクセルのシートにまとめて、CDに焼いたり、ネット上で調べることができるように細かく分析していただけます。先ほどのような記述問題で、自分はどこで不正解であったかこの標準学力調査は詳細な分析をしてくれますので、次のことがわかります。右の縦書きのところは、小学4年生の子ども国語の問題の最終問題の、記述式のところに書いてある注意する点です。「一、6行から8行の間で書きましょう」「二つの段落に分けて書きましょう」「一つ目の段落にはア、イのうちどちらの方がよいと思うかを書きましょう」「二つ目の段落にはその方がよいと思う理由や、ほかの方を選ばない理由を書きましょう」。それから、真ん中のイラストと左の方は、中学2年生の、同じように記述問題の注意事項です。注意する点「8行以上10行以内で書くこと」「3段落構成とすること」「1段落目にはAのポスターの特徴を書くこと」「2段落目にはBのポスターの特徴を書くこと」などが書いてあります。このような指示があるのですが、日野町の4年生の今年のデータです。6行から8行で書くのを達せられた子どもは日野町では48.6%です。2段落で書きなさいという指示が守れた子どもは38.4%しかいません。その下の、どちらが良いと思うか、選ばなかった理由を書きましょうというところは69.9%や60.3%で、ここのところにイコールのマークがあり、全国の平均とそんなに遠くないのですが、割と単純に思う2段落で書きましょうという、ただそれだけの指示が読み取れていなかったり、守れていなかったりして、2段落で書くという力が身につけていないのですね。これは中学生でも同じです。3段落で書きましょうというところが、中学2年生の子は32.6%しか達成できていません。まず3段落構成でこれを書かなければならないというルールに縛られているということが意識できていない。中学2年生の場合は、これが皆よくなくて下向きの三角がついていますが、これがとても気になることです。

それから、標準学力調査の問題は、小学2年生から5年生までと、中学1年生・2年生と全部あるのですが、国語は特に時間配分が難しかったりするので、最後の方に漢字を答えたらいいだけや選択したらいいだけの問題が残っているのにそれに手を付けずに終わるとか、仮に最後に記述式の問題があれば、もう残り時間でこんなのはできないと放棄してしまう傾向があるのだと思います。これが2年生の問題で、黒いところが無回答率です。このあたりは記述式ですということが書いてあるのですが、条件に沿って書くものです。これは3年生の最後の問題の無回答率です。それから4年生です。後ろになると正答率がどんどん下がっていきます。5年生も最後の

問題を放棄しています。中学1年生です。2年生にいたっては、4割から5割の子が最後の問題に手を付けていない。原稿用紙を見た瞬間、長文を見た瞬間にもう間に合わないという感じになるのではないかと思います。これらのことから、効率よく解ける仕方などを教えるのが良いのかどうかは別として、何回もこういう紙をめくって受けるという経験をさせるというのは大事だと思います。こういった経験に出会ったことのない子どもたちが小学6年生や中学3年生になって初めてこれを受けるとなったら大変だと思います。お金をかけて標準学力調査をさせてもらうだけじゃなくて、結局、日々の授業のなかでそういう授業をしているかということだと思います。日々の授業でそういうことをせずにドリルだけをして正解をもらっているだけの子どもに解けるはずはないので、そういう授業改善をしていく必要があります。授業改善の方向性としては、学習直後だけではなくて忘れた頃に授業のなかでもう一度そのことが出てくるような、繰り返し定着させる授業の構成をするなどが重要です。それから毎日の授業のなかで自分の考えを友だちに説明するということが大事です。こういうことに、これから導入されたGIGAスクールのタブレットなどをうまく使っていけます。あと、新聞記事を使った学習や、生活日誌を書くときに80文字以内に書きなさい、今日は50文字以内で必ず書きなさいなどの文字数の制限をするなど、あるいは計算の技能ができただけで終わっていないで、なぜだろうという問いの生じる授業をするとか、そのなぜかということの説明づけるといふ癖をつけるということ、毎日の授業のなかでもっとやっていかなければならないということが授業改善の方向性だと学校の方では分析しています。今回説明できなかった他教科、特に算数・数学を見ていただけたらと思いますが、他学年の調査もお手元に置きましたので、お感じになったことやご意見等をお聞かせいただきたいと思います。以上で説明を終わります。

町長

ありがとうございます。非常にわかりやすい説明でした。

ではこれに関連して意見交換をさせていただきたいと思います。

ご意見等がありますか。

西村委員

解答するにはまず問題を読み解く力が要求されます。先ほどのお話にもありましたように、要領の差というのは結果に反映します。私も多くの資格試験を受けました。そういうのは時に過去の問題を集中的に勉強しました。そうすると試験の出題の傾向などがわかってきますし、解答の要領がわかってきます。そうするとそれなりに正解できます。先ほどの説明のとおり、問題に対して解くという技術的な面でのメリットが高いのではないかと思います。もっとも、ベースになる部分を理解することが基本ですが、どうしてもテストということになりますと、そういうところが点数に現れるのではないかという感想をもちます。

小椋参事

実際に過去の問題を徹底的にやっている都道府県はたくさんあります。しかし、滋賀県は学力をつけなければならないということで、すぐ上がる点数を目指さず正攻法でやっています。

西村委員

私が今述べた意見は、現実の社会で経験するとそういうことが身についてくるということになるという意味合いで言いましたが、先ほど言われたことが正論だと思います。過去の問題に時間を

とって肝心の勉強ができていなければいけませんので、基本的なことをきっちり学ぶということが大事だと思います。新聞報道などで点数を都道府県別に公開するということをしますと、それを見た人には、その一面しか見えませんので、本当に深いところはどうかということは、時系列も含めて、人間形成も含めた大きな部分で見ないといけないと思います。

吉澤委員

学力調査のための学習をしなければならないというのが、私としてはどうとらえたらいいのか悩むところです。先ほどから出てきます学力調査の東北、北陸地方のところは結果が良いようなのですが、それがなぜ結果が良いのかということを知らない状態でいるのですが、そういう県を真似するのがよいのか、滋賀県は滋賀県でという思いを求めていく方がよいのか、そういうところも今の私にはわからないというところです。

小椋参事

国県が言うには、これから子どもたちにこういう力をつけないといけないということを先生方や子どもたちにわかってもらうために、こういう問題を作っていると言われます。日々の授業で、こういう問題を解けるような力をつけることがこれからの日本では必要だという論調なので、高校入試などの問題が実際にこういうスタイルに変わってきています。大学でも一部これをやろうとしてうまくいかなかったということが最近起こっていましたが、記述式は採点しにくいなどが話題になっていました。とにかく、これからの学校で教えることは、こういうことが解ける力を学校でつけてくださいということで、点数がとれるようにしてくださいではなくて、こういう力が子どもたちにつくようにしてくださいと言われています。

神川委員

私の小学4年生と6年生の子どもがこのテストを受けたのだなと思いながら受けました。やってみて難しかったので、最初に関いて問題がたくさんあるという時点で、もう無理だと思ってしまう子もいるのだらうなと思いました。そして、小学4年生の子は、昨年一年間学校の宿題で、ほぼ日記の宿題はなかったので文章を書くということをしていなくて、小学4年生になって日記の宿題が復活したときに何を書いていいかわからないという状態で、一から先生にこういうふうを書くということを教えてもらって、やっと半ページ書けるようになった子がほとんどだったようです。文章を書くということを嫌がっていて、去年一年間なかったのに、なぜまた書かなければならないのかという思いがあるようで、やはりこうして文章を書くことは大事だと思います。

小椋参事

議会でも議員さんから、GIGAスクールが始まって何でもタブレットでやっていたら、やはり紙と鉛筆を使って書くということで頭に定着するということがあるのではないかというご質問がありました。なんでもタブレットというようにならないようにしてほしいというご意見もいただいたのですが、タブレットなどが加わることで、思考を今までになかったものとつなげて膨らませていくという部分には有意だと思いますが、しっかり紙に書いたり、書いたり消したりすることも並行していく必要があると思っております。また、文章で表現するということは、どの学年も通じて、何年もかけて少しずつ力を伸ばしていったらいいいけない部分なので、先生によって得意不得意やどういう宿題がよく出るかという特徴があると思うのですが、やはり学校

を挙げて学年の発達段階に合わせてこういう力をつけていくべきだと、そろえて考えていくべきだと思います。

西村委員

この前、日本経済新聞のセミナーだったと記憶していますが、中央教育審議会長の渡辺光一郎さんが、どういう人材が今の経済社会で要請されているか、必要なのかということでお話しされました。難しいのは、そういう要請があるということは、よくわきまえたうえで、今の初等・中等教育の段階は人として基本的なところを身につけてもらうというところを大事にしてやっていかなければならないと思います。ある段階になって、例えば、一つの専門的な仕事や大学、大学院という段階になれば、多くの学び方があります。その時の世のなかのニーズに合わせた学びをしていったらいいと思うのですが、特に、幼稚園・小学校・中学校といった段階であまり先を見すぎるのはどうなのかと思います。世の中のニーズを認識しつつ、基本的なところを子どもたちに身につけてもらうことが大事だと思います。

町長

私も久しぶりに試験を受けさせていただいたのですが、私も西村委員の言うとおりの、第一義的に人としての部分が大事だと思います。そして、文科省がどういう考えか、人材というか、時代も変化していますので、結局それが勉強なのか、スポーツなのかわかりませんが、自尊感情を持ちながら、社会へ出ていく社会であってほしいし、一方、現実的には試験によってはかる社会であります。高校、大学受験や公務員試験など依然社会は数字ではかっています。あえて逆のことをいいますと、一定問題を見たときにアレルギーがある子どもであってはいけないと思います。今まで何回もやってきたし、習ってきたという機会を与えることが必要だとも思います。先ほどの国語にしても設問から見た方が効率的だとか、確かに小手先で中身の少ないことですが、解けたことに対する快感だとか成功体験になったりもします。その一方で社会の現実として解き方を学ぶことを教えることや、慣れてもらうことも大事だと思います。そうでないと例えば受験などで問題を解くことにアレルギーをもつと、本当は自分の志望する高校や大学に行けたのに、今までに経験する機会がなかったことにより、志望校にいけないことはかわいそうなことだという見方もできると思いました。その上で自分が進路を選択する。いろんな社会、世界があり、子どもたちに一方に決めつけない、選択肢のある教育が大事だと思います。

小椋参事

文部科学省は2025年から中学3年生の学力調査、2026年から小学6年生の全国学力学習状況調査もCBTに替えていきたいという報道があります。今、国からCBTの実証をする学校を募集されています。問題用紙などをたくさん刷り、採点する時間や予算を効率化しようということと、欧米や東南アジアなどのコンピューター教育の進んだ国の学校はメールやWEBの情報などを組み合わせて、それが自分の生活にどう関係するのかというレポートを書くようなことになっています。国際調査のPISAもメールやWEB情報を使って自分の考えをまとめなさいというテストになっています。日本の子どもの正解は低く、チャットやゲームなどをしたりすることが多く、そういう活用ができていないことが言われています。GIGAスクールの端末を入れたので、各学校の調査をCBTにするということ言われてくると思います。

教育長

3月まで学校現場にいましたので全国学力学習状況調査の結果は日野町の全体のデータを左右します。日野小学校では2分の1です。かなりのプレッシャーです。問題の解き方は、私が出前授業をしていました。6年生ではなく5年生の教室で来年はこういう問題等が出そうであると。また、過去問題を使用し、大問を1枚のA3プリントにしテストしたクラスとここにある冊子にしテストしたクラスとでは違いがありました。子どもたちは市販のテストに慣れています。学校のテストは上に問題があり、下に解答があります。子どもたちはページをめくるだけでストレスになります。やはり、慣れていくことが大事です。細かいことですが、右利きの子どもは問題用紙を左側に置いて、回答用紙を右側に置くということを指導します。授業改善ですが基本的なことを指導しなければなりません。先生たちには無回答をなくすようにと指導していました。先生が子どもたちにどのようにアドバイスするかは重要です。

書く力ですが、学校では100字作文の取り組みもしていただいています。書く力は努力すればするほど伸びてきます。新聞の記事を見てコメントを書きましょうなどもしています。もう少しハードルをあげるのなら、そこに3つぐらい条件を付けてコメントを書かすことも重要です。読み解く力も大事ですが、自分の考えをどう書きまとめていくのかというプログラミング学習が重要です。論理的思考力は書く力により問われます。その次に話す力が試されています。義務教育の最終出口ではその力が問われます。先生方にはその力をつけなければと言っています。

町長

その他、ご意見等がありますか。ないようですので、これで終了させていただきます。